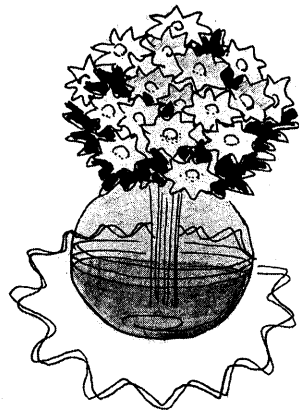


忘れられない失敗

松井 とし



五月のある日、四歳児のN子が鉄棒から落ちて舌を縫う大けがをした。

その日子どもたちは手をつなぎ、並んで歩いて、初めて園外の公園へ出かけた。固定遊具で遊んだり、クローバーをつんだりして、帰り支度を始めようかと思っていた矢先、ずっと鉄棒の所にいたN子とY子が手をつないでやってきて言った。

「クルンって出来たの！」

「そう！ じゃ見せて」

それ迄の間に、彼女たちの存在を眼で追いつつも、かわりをもてなかったという思いが先に立ち、私は二人の後について行った。身も軽く、すっかりマスターしているY子は、片足をかけてぶら下がり、後ろ向きに下りた。その横でN子は、足がつく前に手を離し、ドスンと重たく落ちた。そして、咄嗟の時には本能的にひっこめると言われる舌を、

自分の体重をかけて噛み切ってしまった。

母親は、あいにくデパートへ出かけていて緊急連絡がとれない。事情を話し励ます私の言葉に、N子は静かにうなずき一人で医師の処置に耐えた。

N子は、いわゆる育児者の一般編が通用しなかった子どもである。母親は同年齢の子どもを求めて公園へ出かける。親同士はすぐ親しくなるのだが、当のN子は母親から一歩も離れない。子ども同士の遊びをほとんど経験せず、園の生活を始めたN子は、歩く、走る、跳ぶ等の、身体的基本的な動きにもぎこちなさが見られ、私は、彼女のアンバランスな発達をとらえていたつもりであった。

なのに、あの一瞬の心の空白はどうした事か。前転ではなかったので気が緩んだのか。私の意識は「支える」姿勢をとっていなかった。

幸い経過は順調だったが、傷が癒えてからN子の激しい母子分離不安が再燃した。彼女が心の葛藤を吐き出し、新たな自己に出会い、自信に満ちた生活を始める迄に長い時を要した。N子のけがは、私にとって許されない過ちだったが、保育の専門性や発達を考える際のターニングポイントでもあった。

(神奈川県立教育センター)